

二枚設けて、筵道に南殿の廻廊に敷て、一枚をあゆませ給ふほどに、いま一枚を去きくして、内侍には伊豫内侍、少輔内侍二人ぞ心えたりける、これ等先たるしの御筥と寶劔とをば御車に入てけり、支度のごとくにて、焼亡の間さりげなしにてやり出してけり、さて火消て後、信頼は、焼亡は別事候はずと申させ給へど、藏人して伊豫内侍に云ければ、さ申候ぬとて、此内侍どもは小袖ばかり着てかみわきとりて出にけり、尹明はまづかに長櫃を設けて、玄象、鈴鹿、御笛の箱、大刀契の唐櫃、晝の御座の御大刀、殿上の御椅子など沙汰し入て、追ざまに六波羅へ参れりければ、武士ども押へて弓長刀さしちがへくして固めたるに、誰か参らせ給ふぞと云ければ、高く進士藏人尹明が、御物もたせて参て候なりと申させ給へど、申たりければ、やがて申てとく入れよとて参りにけり、ほのくとするほどなりけり、

〔愚管抄五〕内裏には信頼略中紫宸殿の大床にたちて、よろひとりてさける時、大刀契の唐櫃の小かぎを守刀に付たりけるを、師仲は内侍所の御體をふところに入て持たりけるが、たべ給へそのかぎ、これにぐしまゐらせてもたん、その刀に付て無益なりといひければ、まことにどてなげおこせたりければ、どりていづちも御身をはなれ申まじきぞとて、あゝすりの直垂をぞきたりける、

〔古事談〕王道后宮平治亂逆之時、師仲卿奉取内侍所奉安置家姉小路北、東洞院之西角ト云之車寄妻戸中、其體新外居高足之上敷薦一枚、乍褰奉置云云、翌日奉尋出内侍一人、博士已下女官等参仕之、奉褰替之後、渡御大内、供奉職事一人、近將二人云々、

〔神宮雜例集二〕内侍所之事

永曆元年二月十一日宣命云、猥以愚昧、天忝傳神器利多、晨兢夕惕天シ、如履薄氷シ、爰去年元平治十二月十日、事出不圖、天兵革俄起之間、爲凶惡之輩、雖被掠取内侍所毛、依宗廟之厚、助天奉納之櫃、雖紛